

【特集論文】

現代世界におけるスポーツ人類学の可能性

窪田 暁 (奈良県立大学)

はじめに

本稿は、文化人類学におけるスポーツを対象とした研究の現代的な視座を提示することで、新自由主義的な世界秩序が浸透する時代において、「スポーツ人類学」がどのような可能性をもつかを考察することを目的としている。

本稿執筆のきっかけは、二〇一八年に上梓されたニコ・ベズニエ、スーザン・ブロウネル、トーマス・カーターによる『*The Anthropology of Sport: Bodies, Borders, Biopolitics*』の翻訳プロジェクトに関わったことによる(二〇二〇年に『スポーツ人類学——グローバルゼーションと身体』として出版)。

同書は、「人類学にとってのスポーツについて書かれたもので、スポーツというレンズを通してどのような幅広い問いを投げかけることができるのかを示したものである(ベズニエほか二〇二〇:四〇九)。三人の執筆者が、ローカルなも

のをグローバルなものとリンクさせることに関心を寄せているため、伝統スポーツよりもグローバルなスポーツシステムと結びついた近代スポーツに重心が置かれているが、それは近代スポーツが急速な変化を続ける現代社会の中心問題である伝統と近代との緊張関係を映し出しているとの認識に立つからであった(ベズニエほか二〇二〇:二五―二六)。

このような視点で書かれた同書を翻訳したのは、これまでドミニカ共和国(以下、ドミニカ)からアメリカへ渡る野球選手を「野球移民」と捉え、彼らの移動を生み出す要因をドミニカのローカル社会の人々の実践から明らかにする過程で、上記のような認識を共有していたことによる(窪田二〇一六)。だがその一方で、人類学の強みである特定の地域に密着するフィールドワークという方法論が、当該社会の「文化」としてのスポーツではなく、グローバル化の文脈のなかでスポーツを論じることを難しくさせてきたのではない

かという問題意識ももっていた。

そこで以下ではまず、『スポーツ人類学』を下じにしつつ、スポーツを対象にした文化人類学的な研究がどのように展開してきたかを整理し、それが近年のスポーツを取り巻く社会の変化にどのように関連しているのかについて明確にし、ておきたい。

I. スポーツという鏡に映すもの

1. 人類学とスポーツ

『スポーツ人類学』の第一章は、「十九世紀後半および二十世紀前半以来、人類学においてスポーツの存在感は薄かった。「スポーツ人類学」というものも、新たな千年紀までなかつた」との指摘からはじまる（ベズニエほか二〇二〇…三三二）。人類学においてスポーツを対象にした研究がほとんどみあたらないことを踏まえると、この指摘は間違っていない。一方で、日本には一九九八年に設立された日本スポーツ人類学会が現在も活動を続けているため、最初にベズニエらが「スポーツ人類学」はなかつたとする理由を明確にしておく必要がある。

同学会はスポーツ人類学という名称を掲げてはいるが、ベズニエらという「スポーツ人類学」とは異なる目的を有している。その違いは、同学会の創設者のひとりである寒川による説明と比較すると明確になる。

日本スポーツ人類学会とアジアスポーツ人類学会は英語表記を Sport Anthropology としました。ここには文化とはなにかを問う一方法論としてのスポーツ研究ではなく、スポーツとはなにかを問う方法として人類学を用いるという認識が表明されています。（略）体育学やスポーツ科学に足場を置く人類学研究であるという自覚がありました。こうした立場から構想される研究テーマは、当然に、体育学やスポーツ科学で醸成される問題世界から着想されることとなります。（略）スポーツのパフォーマンスや技術、教育、健康といった身心に関わる幅広い問題領域が開拓されてきました。これらが文化人類学の興味を惹くことではありませんでした（寒川二〇一七：二一三）。

一方のベズニエらは、以下のように述べている。

我々は本書で、単に社会や文化におけるスポーツの位置づけについてのみ描くことを目指したわけではなかつた。つまり、人類学の概念や方法がスポーツにまつわるトピックにいかにも適用可能かを探ろうとしたわけではなかつた。そうしたありきたりな仕事は繰り返し試みられてきたが、まとまりのある結果をもたらしてはこなかつた。我々がそれをありきたりと呼ぶのは、結局のところ、そうした研究は少数の社会科学者の関心しか集めないからである（ベズニエほか二〇二〇：四〇九）。

この対照的なまでの両者の違いから、同学会の研究活動が文化人類学の興味を惹くことはなかったのは当然であろう。

それにも関わらず、学会名から想起される研究像と現実のギャップは、しばしば同学会がスポーツを対象とした人類学的研究の場であるとの誤解を招く要因にもなってきた。たとえば、儀礼や遊戯を伝統スポーツと捉え、機能主義的なアプローチによる分析に終始する研究に対し、日本のスポーツ人類学は、「スポーツ」という切り口から当該「社会」や「文化」のどのような面を浮き彫りにできるかについての方法的議論については十分になされているとはいい難いとの批判が向けられるのはそのためである（金二〇〇九・九八）。

こうした批判は、そのまま文化人類学（以下、人類学）においてスポーツの存在感が薄かったことにも関係する。その要因は、スポーツという用語が幅広い活動を含有しうるものであるにも関わらず、一般社会や隣接する学問分野において、スポーツが近代スポーツを指すものとして限定的にあつかわれてきたことにある。社会学者によって編まれた「スポーツ文化論」の入門書が、スポーツとは「近代社会を形成していくうえで重要な役割を果たすよう意図的につくられた身体運動文化であった」との説明からはじまるように（菊二〇二〇・二二）、近代社会を支える人々が実践するスポーツを想定していることがわかる。

これに対し、西洋近代を相対化することを命題としてきた人類学は、儀礼を伝統スポーツとみなしたり、次節で詳述す

るように、非西洋社会で実践される近代スポーツを取りあげてきた。そうした研究は、西洋とは異なる価値観で形成される社会が存在することを示すために、特定のスポーツがいかにか当該社会を象徴する存在であり、それがどのような社会統合の役割をもつかを描くことに関心を寄せる傾向にあった。また、人類学的方法論としてのフィールドワークが非西洋の小規模な社会でなされてきたことも、スポーツを特定の集団の「伝統」として描くことにつながったといえよう。だが、西洋と非西洋（あるいは近代と伝統）という二項対立的な認識枠組みを前提とした視点は、一九八〇年代以降に進展したグローバル化が生みだす現実のなかでその有効性を失い、それに代わる新たな視座が求められるようになったのである。

こうした社会の変化に加え、従来のアプローチを刷新する動きが人類学の内部から生まれる。「ライティング・カルチャーショック」である。一九八六年に出版されたクリフォードとマークスによる『文化を書く』は、サイードの『オリエンタリズム』をふまえ、文化を書く、他者について語るといふ民族誌そのものないしは、従来の機能構造的な人類学のアプローチを批判するものであったため（クリフォード、マークス（編）一九九六）、これ以降、人類学では「文化」を明確な境界に区切られた固定的な実体として描くことは困難になったのである。たとえば、一九七二年に発表されたクリフォード・ギアツの『ディープ・プレイ』は、鬮を広義のスポーツと見なせば、人類学によって書かれた伝統スポー

ツの民族誌といえるが、やはり同書のなかで「(ギアツによって)構築された原住民の、構築された視点から見た、構築された理解」に過ぎないとの批判にさらされることになった①(クラパンザーノ 一九九六:一三三)。

このように、今世紀に入るまで人類学においてスポーツの存在感が薄かった要因は、現実社会の変化と一九八〇年代に人類学を襲った「ライティング・カルチャーショック」によって、西洋近代を相対化するために伝統スポーツを当該社会の「文化」として本質的に切り取ることが困難になったことによる。そこで展開された民族誌批判は、人類学者に「文化」をどのように描くべきかという問いと真摯に向きあうことを課したが、それは「他者」を理解しようとする者がたどらなければならぬ必然的なプロセスだったといえよう。こうした経験が人類学にとって対象としてのスポーツの重要性が認知されることにつながるが、それは二十一世紀という時代を読み解くうえで、グローバルに展開するスポーツが有効なレンズを提供しようとの理由からであった。

2. 日常生活のなかのスポーツ

ただし、スポーツのグローバル化は新しいテーマではなない。西洋で発明された近代スポーツが、ヨーロッパ列強による植民地支配とともに第三世界に伝播する過程で、その土地に固有の伝統スポーツが駆逐された結果を文化帝国主義とみなす議論は古くから展開されてきた(e.g. Eichberg 1984)。

それに対し、被支配者側の人々による近代スポーツの受容にはスポーツや地域ごとにバリエーションがあり、文化帝国主義として一括りにできるほど単純ではないとの見方が提出されるなど(グッドマン 一九九七、R. ベズニエほか二〇二〇:九〇―一二八)、ポストコロニアル的状况を読み解くにあたり、近代スポーツは恰好の材料とされてきたのである。

こうした議論は、二十世紀後半に登場する近代スポーツのグローバル化を扱う社会学的研究にも見受けられる。スポーツ社会学者のクライン②は、ドミニカ野球の発展をアメリカによる政治経済的支配と絡ませて文化ヘゲモニーの議論を展開した。ここでは、グラムシの概念を援用しながら、ヘゲモニーと抵抗がドミニカにおいて緊張関係をもつて存在しているとしたうえで、アメリカの「国技」である野球が、政治経済的支配に対する抵抗のシンボルとなり、ナショナル・プライドを駆りたてていると指摘する。その背後には、アメリカに対する経済的・文化的な憧れとナショナル・プライドを表明したいというドミニカ人の複雑な感情が隠されており、それがアメリカ文化への抵抗と受容が錯綜する「闘争の場」となって表象されるのが野球なのだと指摘す③(Klein 1991: 111-112, 152-153)。このように、近代スポーツがそれを受容した側の人々にとって、支配者側への抵抗する手段やナショナル・アイデンティティを統合する役割を果たすといった議論はスポーツ社会学を中心に盛んにおこなわれた(e.g. Arbena (ed.) 1988)。

こうした議論は、第三世界におけるスポーツを覇権国家に抵抗するための文化メカニズムとしてとらえる傾向があり、そこからは当該社会の人々が受容したスポーツをどのように経験しているのかという実態はうかがうことができない。だが、そうした役割を担うはずの人類学的研究は、前節で述べたように、特定のスポーツがいかに当該社会を象徴するかという視点でおこなわれていた。たとえば、象徴人類学の手法でブラジル・サッカーにおける試合の演劇性や儀礼的構造を示したダ・マッタの民族誌や (Da Matta (ed.) 1982)、フィジーにおけるラグビーの「土着化」を論じた研究である (橋本二〇〇一)。こうしてみると、二十世紀後半までの近代スポーツを扱った人類学的研究が、その対象を非西洋社会に限定してきたことがわかる。この点については、人類学の学位を取得し、研究者としての道を歩み始めたクラインが、西洋社会と近代スポーツを対象にすることへのこだわりから、活躍の場を社会学に求めざるを得なかったことを回想する記述からもうかがえる (Klein 2008: 48)。

しかしスポーツを対象にローカル社会の人々の実践を論じる際に、必ずしも近代と伝統という既存の枠組みに縛られる必要はないし、非西洋社会におけるスポーツの受容を論じるうえで、どれだけ当該社会の「文化」を象徴するものになったかを前提にする必要はないだろう。同様に、スポーツの持つ社会統合の役割といった人々の生活世界の実感からかけ離れたテーマを設定する必要もないだろう。むしろ現代におけ

るスポーツを対象とした人類学的研究に求められるのは、グローバル化とともに、「人権」「公正」といった西洋的な価値観がある種の「普遍性」を伴って世界各地に浸透している現実を注視し、それとは異なる価値観にもとづく非西洋社会の人々のスポーツとの向き合い方に注目することである。

そのような視座とは、スポーツをある特定の社会全体を説明する道具として扱うのではなく、スポーツをアスリート個人や彼らを取り巻く人々が生きる日常生活の文脈のなかに配置し、ローカル社会における人間関係や社会関係のなかで展開する相互交渉——親族、宗教、贈与、人種、ジェンダー、セクシャリティといった価値体系と密接に関わる——から生みだされる新たな価値をもとに、現代世界の多様なあり方を提示することであろう。こうしたミクロな実践から問いを立てる手法は、フィールドワークを軸とする人類学の方法論的強みであり、スポーツを対象とする人類学的研究の可能性^③ともいえる。

Ⅱ. 新自由主義時代のスポーツ人類学

1. スポーツの倫理的価値

「ライティング・カルチャーショック」以降、人類学者は自分の生まれ育った世界とフィールドの差異だけに注目するのではなく、両者が地続きであることを意識し、自社会とフィールドの置かれている同時代的な社会構造と歴史的背景

をふまえた書き方を模索するようになっていく。それは現実世界が変貌を遂げはじめたことと無縁ではなかった。内戦と殺戮、開発と環境破壊、移民と排除、貧困と感染症の蔓延といった「問題」は、もはやかつての人類学者がフィールドで向きあうべきローカルな「問題」ではなく、グローバルな依存関係のなかで「地続き」に現象する私たちの「問題」となったからである（松田二〇一三：二一）。

人類学がこうした現代的かつ普遍的なイシューに関与するようになったことは、スポーツへの関心を高めることにつながった。『スポーツ人類学』では、人類学にとっての課題は、ミクロなスケールをいかにしてマクロなスケールに接続するかであったが、スポーツの民族誌は、この難問に取り組むうえで、素晴らしい方法であることが証明されたと述べている。ローカルなコミュニティでなされる日常的な身体的実践は、世界規模のスポーツシステム（たとえば、メガイベント、アスリートの移住ネットワーク、資金を提供する多国籍企業、メディアなど）になんらかのかたちで接続されているため、そのシステムとの関連でスポーツを論じることでスケールアップを可能にするからである（ベズニエほか二〇二〇：二四）。

こうした人類学におけるスポーツの重要性は、一九九〇年代以降に世界中を席卷した新自由主義的な世界秩序の浸透という文脈のなかでさらに増している。新自由主義とは、二十世紀後半から現在における経済体制を指し、一般に市場の規

制緩和と民営化に代表される「小さな政府」への志向、個人の自由と責任を強調するイデオロギーとして理解されるものである（Harvey 2005）。新自由主義がもたらした社会的不平等の拡大といった問題は、とくに第三世界の貧困層に深刻な影響をおよぼしている。かつての植民地支配が構築した単一作物の生産に依存する脆弱な経済構造は、一九八〇年代以降に農作物の国際価格の暴落によって崩壊し、農業従事者の生活基盤は奪われた。

ドミニカを例にとれば、産業構造が伝統的な農業から観光業中心のサービス業やフリーゾーンにおける製造業へと変化するなかで、地方から都市への移住がさかんにおこなわれてきた。しかしながら、外資獲得と雇用創出を目的にすすめられた観光開発やフリーゾーンの誘致は、その主体を旧宗主国であるスペインやアメリカの資本が独占するというポストコロニアル的状况をより強化し、社会的不平等の解消につながらないばかりか、環境破壊や地域社会の崩壊、都市郊外のスラム化といった新たな問題まで引きおこしている。このような背景から、第三世界の人々は先進諸国での職を求めて海外へ移住することが、生活の困難から抜け出す唯一の方法だと考えるまでになっている。こうした海外移住への志向性の高まりは、自らの身体を資本に海外での成功を望む若者を増加させることになった。

今世紀に入ると第三世界が直面する「問題」の解決のために、スポーツを開発援助のツールとして活用する動きが登場

する。その多くは、NGOによって実施されるコミュニティ開発にスポーツを絡めた活動が伴うのが特徴で、貧困や紛争、災害に直面する子どもたちにスポーツを通じて教育活動やエンパワメント活動を展開する。だが、「開発と平和のためのスポーツ」(SDP)と呼ばれる取り組みは、対象地域の社会的文脈と世界経済の構造的な不平等への理解不足から、問題を解決するよりも悪化させてしまうことがしばしば指摘されている。その原因は、こうした活動の多くが西洋社会のスポーツ観を前提にしているために、個人の意志と倫理的価値を重んじる傾向にあるが、それは問題の解決を個人の自立、責任、そして「エンパワメント」へと単純化するイデオロギーに支えられているからである(ベズニエほか二〇二〇…三七四―三七九)。

ここで重要なのは、スポーツを通じた「エンパワメント」は、こうした活動に積極的に参加する個人の意志によってのみ実現するものではないということである。どのようなコミュニティが望ましいのか、なにをもって「公正」とみなすのか、といった問いには絶対的な解が存在するわけではない。また、個人の自立(成功)とコミュニティとの関係の維持は両立可能なのかといった問題は、成功したアスリートに葛藤を呼び起こしてもいる。それにも関わらず、NGOが掲げる「グローバルな良心」(ベズニエほか二〇二〇…三七六)の名のもとに、こうした複雑な実態は捨象されてしまう。単純化された視点をしりぞける人類学は、西洋社会のスポーツに附着する個人の意

志や倫理的価値が、第三世界の人々の価値観や実践と異なっているかを問う。そのうえで、それがどのような経験や社会関係のなから生みだされたのか、あるいはそうした個人のスポーツ実践を支える論理は、周囲の人々との妥協や交渉のなかでどのように再編されているのかを、実際の相互交渉が展開する現場から実証的に考察する。

このような視点に立ち、新自由主義の浸透がスポーツをいかに再編したかを問うたのは、やはりベズニエを編者のひとりに連ねた論集だった。二〇二一年に出版された *Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal Age* は、世界各地で実践される六つの競技(サッカー、ラグビー、クリケット、マラソン、テニス、セネガル相撲)の事例を比較検討した民族誌である。同書は、新自由主義が世界中の若者の身体、主観性、ジェンダーにどのように浸透したのかという問いに答えるために、アスリートとそのコミュニティがスポーツによる移動経験をどう捉え、経験し、望んでいるのかを明らかにしたうえで、それが社会的、政治的、経済的、観念的な文脈の相互作用のなかでいかに機能するかを考察したものである(Besnier, Calbro and Guinness (eds.) 2021)。『スポーツ人類学』と基本的な問題関心は変わらないが、新自由主義時代の世界にとっての重要な問題を探求する手段として、アスリートの移動経験に焦点を絞り、世界各地の実態を比較するという点で、前者が概説にとどめていた内容を後者が具体的な事例で補足するものとなっている。

次節では、ベズニエらという重要な問題とはいかなるもので、スポーツによる移動経験を明らかにすることで、どのように浮き彫りになるのかを掘り下げてみたい。

2. 「スポーツ移民」の人類学に向けて

新自由主義が想定する人間像とは、自己の利益を極大化するために合理的に計算し、自律的に選択し、その結果を自らの責任のもとで受けとめる、自由で自律した責任ある市民である。こうした人間像は、欧米のプロスポーツ界での成功を目指して過酷な練習に励むアスリートの姿に重なる。だがアスリートの移動経験は、メディアの語りにもられるような個人の努力によって困難を乗り越えた成功物語として理解できるほど単純なものではなく、人々の願望、時代認識、周囲の人々との関係などのマイクロレベルの要因と、経済や科学技術の発展、世界各地で生じる大規模な移動といったグローバルな変化などのマクロレベルの要因が複雑に絡みあうダイナミックな動態のなかで説明される必要がある (Besnier, Calbro and Guinness 2021: 19)。では、このマクロとマイクロの接合は、具体的にどのような局面で可視化されるのか。アスリート（エリートレベルを除く）は、新自由主義によって再編されたスポーツ界のなかで、短期契約、不安定な雇用、地理的な不確実性のなかで格闘することを求められるが、その過程で培った精神的持久力と戦略的なアプローチによって明確になった「アスリートの自己」を育んでいく。一

見すれば、新自由主義が求める人間像そのもののように映る「アスリートの自己」だが、そこにはスピリチュアル（超自然的）な力を利用するといったローカル社会の価値観にもとづく実践が埋め込まれている (Besnier, Calbro and Guinness 2021: 16)。また、成功したアスリートは故郷の親類への送金に対するプレッシャーにさらされることになるが、故郷からの期待はアスリートの実際の収入とは釣りあわないことが多い。アスリート自身も出身社会の贈与経済的な文脈のなかで生産性を誇示したいとの願望を持っているが、一方で、移住先で出会うコーチから将来を見据えた儉約を推奨されるなど、異なる経済レジームとの葛藤を経験することになる (Besnier, Calbro and Guinness 2021: 17)。

ここで重要なのは、新自由主義によってもたらされたアスリートの移動経験が、彼らを取り巻く人々を巻きこみながら、出身社会の構造を再編していることである。たとえば、アスリートからの送金が、教会の成長、個人の名声の概念、家族の義務に対するアプローチといった従来のコミュニティには存在しなかったあり方をもたらすことで、出身社会に張り巡らされた親族や宗教のネットワークといった社会構造のヒエラルキーに変化が生じるとともに、新たなアスリートの移住を促進するために再編されるのである (Besnier, Calbro and Guinness 2021: 15)。こうしたアスリートの移動経験がもたらすマクロとマイクロの接合は、複雑なローカル社会の文脈のなかに組み込まれているため、それがどのような姿で顕在

化するかは、地域ごとに多様なバリエーションがみられることになる。

たとえば、ドミニカ出身の大リーガーは、獲得した契約金の一部を家族・親族だけにとどまらず、出身社会のコミュニティ全体に行き渡る形で分配するのあたりまえとなっていた。この背景には、ドミニカが多くの移民を送り出す志向性をもった社会であることが挙げられる。一九六五年に始まったアメリカへの移民は、年を追うごとに増加の一途をたどり、現在では人口一千万人のうち、三〇〇万人以上が海外に暮らすまでになっており、彼らからの送金がなければ故郷の家族の生計は成り立たなくなっている。こうした社会状況下に配置される大リーガーと出身社会の人々との関係性においては、野球で稼いだ富の一部をどのように分配するかという問題が重要な位置を占めていたのである（窪田二〇一六）。

だが、近年になってこうした実践に変化が見られるようになってきた。かつてのようにコミュニティ全体に行き渡る規模での分配はおこなわれなくなったり、宗教行事の開催資金を提供するといったこともなくなりつつある。こうした変化は、大リーガーが移住先で培った新自由主義的な価値観を反映したものであるが、同時に出身社会の道徳的な価値観を完全に捨て去ってしまったわけではなく、むしろその両者の葛藤のなかで揺れ動きながら、周囲の状況に応じて使い分けられているとも考えられる。

その事例として、元大リーガーがパトロンとして開催してい

るバスケットボールのコミュニティ対抗戦が挙げられる。この対抗戦は、六つのコミュニティ代表チームによって構成されており、各チームの活動資金は、元大リーガーやアメリカ在住のドミニカ移民が出資している。このようなかつての大リーガーが出身社会に富を分配した方法とは異なる新たな実践は、近年における若者を中心にしたバスケットボール人気の高まりが背景にあることは否定できない。しかし、元大リーガーにとっては、自分が好きなスポーツであるバスケットボールの対抗戦を組織することで、出身社会からの富の分配への期待と個人の意志とのあいだで生じる葛藤を解消する方法を模索した結果と捉えることも可能であろう。こうした「野球移民」による分配行動は、アスリートの移動経験がもたらす主観性の揺れが周囲の人々との関係性を変化させた事例のドミニカ特有の現れかたといえる。

上述したように、スポーツを利用した開発援助の取り組みやメディア表象などでは、個人の自立や責任を強調する西洋的な倫理的価値が前提に置かれてきた。だが、アスリートの移動経験から浮き彫りになったのは、スポーツによる移動経験のなかで体現された新自由主義的な人間像が、出身社会のローカルな価値観との相互作用を伴いながら、出身社会の社会構造を再編していくダイナミックな動態だった。新自由主義時代におけるアスリートの移動経験に焦点を絞ったベズニエラの民族誌があぶり出す重要な問題とは、従来の研究が前提としてきた二項対立の図式に収まらない「余白」とも呼べ

る場所に存在する、多様でしなやかな人間の生き様だといえよう。

おわりに

二〇二二年九月、新型コロナウイルスの感染拡大によって中断を余儀なくされていたドミニカでのフィールドワークを三年ぶりに再開した。そこで目の当たりにしたのは、二〇〇四〇代の働き盛りの男性たちの不在である。彼らは非合法的手段によってアメリカへと入国し、親類・知人が暮らすボストンにたどり着いた。こうした傾向はリーマンショック後の二〇一〇年代に顕著になったものだが、新自由主義の浸透が、ミクロレベルで世界中のローカルな人々の日常生活を根本的に変えたのである (Besnier, Calabro and Guinness 2021: 10)。

スポーツの世界もまた大きな変貌を遂げた。新自由主義はスポーツで成功する夢を駆り立てるが、自前の選手育成システムを有する国は少ないため、第三世界の若者はグローバルなスポーツシステムが提供するルートに依存せざるを得ない。そうした状況をヘゲモニー論の延長で説明することも可能であろう。だが、新自由主義的な世界秩序の浸透は、西洋と非西洋（あるいは近代と伝統）といった従来の枠組みを無効にする現実を私たちに突きつけている。アスリートの出身地にはすでに海外へと移住した人々が無数に存在し、彼らからの送金によって故郷の人々の生が維持されており、そのこ

とがまた、新たな移民を再生産する原動力にもなっている。こうした移民への志向性が極限にまで高まった現代において、移動するアスリートを「スポーツ移民」と捉える人類学的研究の意義は大きい。

本稿でベズニエが関わった二冊の著書を中心に、スポーツ人類学の現代的な視座を探ろうと試みたのは、こうしたフィールドの変化が念頭にあったからであり、その現実を論じる（ローカルとグローバルをリンクさせる）うえで、スポーツが極めて有効な対象だと考えたからだった。ベズニエらは多様なテーマを扱っていることから、新自由主義時代の「スポーツ移民」に焦点を絞って考察した。そこからみえてきたのは、個人の努力や責任、あるいは「公正さ」のような倫理的価値を強調する西洋的なイデオロギーが、「スポーツ移民」の移動経験を通して、出身社会に持ち込まれ、そのローカルな文脈とのあいだで葛藤を生みだしているということだった。重要なのは、新自由主義の浸透によって世界中が均質なものとならされてしまうのではなく、またそれに抵抗するかたちで実体のある「伝統的」な価値観が復興するわけでもないという点である。かつてのヘゲモニー論や現在の開発援助を支える倫理的価値に共通するのは、こうした一元的な世界や国家を想定していた／いる点である。これに対し、本稿で提示したのは個別・具体的な人間関係や社会関係のなから生みだされる多元的な社会的な姿であり、それを支える多様な個人の価値観と実践であった。

最後に、このような視座の現代的な可能性は、『スポーツ人類学』の序章のなかで述べられるスポーツの概念を基盤にすることで成立しうることを確認しておきたい。ここでは、スポーツは十九世紀半ばのイギリスで発明された一人の勝者をその他大勢と区別する運動競技であり、その誕生には記録という近代的技术が不可欠であったと述べられる一方で、そうしたスポーツの性質をもとに、何をもってスポーツと見なすかといった立場から距離をおくことが宣言されている（ベズニエほか二〇二〇・一九―二二）。ここから読み取れるのは、スポーツとそれ以外の日常的な活動が、スポーツそのものの本質によって決定されるのではなく、「スポーツ」なるものはグローバル時代における政治的・経済的文脈のなかで構築的に立ち現れるとの認識である。こうした認識にもとづき、世界各地の多様なスポーツ実践を事例に研究を蓄積していくことが、現代的なスポーツ人類学の役割として求められている。それはまた、スポーツに「公正」で「平等」な社会を生み出す価値があるとする一般的な見方に対し、再考を促すことにつながるであろう。

付記

本稿は、科研費（22K13266）による成果の一部である。

註

(1) ただし、闘鶏とは、絵画や音楽や映画や演劇がそうであるように、当事者自身が自分の経験を読み込むためのテキストだとするギアツの解釈は（ギアツ一九八七）、当事者がテキストとして読み込んでいることを跡付けることができれば、フィールドの人々が激動する時代のなかでどのように意味論的なネットワークを構築しようとしているかを描く、スポーツ人類学を構築する可能性を拓くものとなる。

(2) ベズニエらは、クラインを人類学者として高く評価しているが（ベズニエほか二〇二〇・七二―七三）、筆者は本文中でも触れたように、クラインのドミニカ野球に関する一連の研究はスポーツ社会学的研究と位置づけている。

(3) こうした可能性は、人類学だけの専売特許である必要はない。その証拠に、スポーツ社会学者によって、第三世界のスポーツをフィールドワークを通して実証的に描き出す優れた民族誌がすでになされている（石岡二〇二二）。

引用・参考文献

ベズニエ、ニコ、ブラウネル、スーザン、カーター・トーマス
二〇二〇 『スポーツ人類学——グローバルゼーション
と身体』川島浩平、石井昌幸、窪田暁、松岡秀明訳、

共和国。

クラパンザーノ、ヴィンセント 一九九六 「ヘルメスのジレンマ——民族誌記述に潜む、隠蔽された自己矛盾」クリフォード、マークス (編) 『文化を書く』春日直樹他 (訳)、九三—二九九頁、紀伊国屋書店。

クリフォード、ジェームズ、マークス、ジョージ (編) 一九九六 『文化を書く』春日直樹他 (訳)、紀伊国屋書店。

ギアツ、クリフォード 一九八七 「ディープ・プレイ——バリの闘鶏に関する覚え書き」『文化の解釈学Ⅱ』吉田楨吾他 (訳)、三八九—四六一頁、岩波現代選書。

グッドマン、アレン 一九九七 『スポーツと帝国——近代スポーツと文化帝国主義』谷川稔他 (訳)、昭和堂。

石岡文昇 二〇一一 『ローカルボクサーと貧困世界——マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社。

橋本和也 二〇〇一 「スポーツにおける語りと土着性——近代スポーツの土着化」『スポーツ人類学研究』第二号、一一—一七頁。

菊幸 二〇二〇 「スポーツ文化論の視点」井上俊・菊幸一 (編) 『よくわかるスポーツ文化論 (改訂版)』、二二—五頁、ミネルヴァ書房。

金明美 二〇〇六 『サッカーからみる日韓のナショナルティとローカリティ——地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ』御茶の水書房。

窪田暁 二〇一六 『野球移民を生みだす人びと——ドミニカ共

共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク』清水弘文堂書房。

松田素 二〇一三 「現代世界における人類学的実践の困難と可能性」『文化人類学』第七八巻第一号、一一—二五頁。

寒川恒夫 二〇一七 「スポーツ人類学とはなにか」寒川恒夫 (編) 『よくわかるスポーツ人類学』、二—三頁、ミネルヴァ書房。

Arbena, Joseph L. (ed.) 1988 *Sport and Society in Latin America: Diffusion, Dependency, and the Rise of Mass Culture*. Greenwood Press.

Besnier, Niko, Calbro, G. 2021 *Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal Age. In Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal Age*. Besnier, Niko, Calbro, G. 2021 *Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal Age*. Besnier, Niko, Calbro, G. 2021 *Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal Age*. eds.), pp. 3-21. Routledge.

Da Matta, Roberto (ed.) 1982 *Universo do Futebol: esporte e Sociedade Brasileira*. Pinakotheke.

Eichberg, Henning 1984 *Olympic Sport: Neocolonization and Alternatives. International Review for Sociology of Sport*, 19 (1): 97-105.

Harvey, David 2005 *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford University Press.

Klein, Alan M. 1991 *Sugar ball : The American Game, the Dominican Dream*. Yale University Press.

Klein, Alan M. 2008 *American Sports : An Anthropological Approach*. Routledge.

